子どもの心を翻訳する

藤縄　真理子

1. はじめに

最近、私のしていることは子どもの心の翻訳業ではないかと感じることがある。情緒障害児や自閉症の治療にあたっているセラピストとの話合いや、幼稚園や保育園での職員研修などに参加して私のやっていること、私の学んでいることは、いかに適確に翻訳して伝えるかということのように思う。

ここで、それらの体験の中からいくつかのエピソードをひろいあげてみたい。（尚、個人の秘密を守るため、名前や状況に若干訂正が加えられていることをお断りしておく。）

2. 「今日はえらく機嫌が悪くて落ちつきがない」

通君は自閉症と診断された男の子で、ある療育教室に通ってきていた。はじめのころはただ不安げに歩きまわり、あちこちの戸びらを開けたり、カーテンの後をのぞいてまわり、時折恐怖に満ちた奇声をあげるだけだったが、2年余りのプレイセラピィ（遊戯治療、週1回、1時間）の中で徐々に変化をみせ、最近は、ことばはほとんどないままだが情緒的には安定し、新聞に強い興味を示し、気に入った一角をていねいに切りとってはそれをじーっとみつめ、嬉しそうにそれをもって歩いたり、セラピスト（担当治療者、保母）に抱かれたりして落ち着いた時を過ごすことを常としていた。ある日、通君はやって来た時から何かおちつかず、すぐ新聞をとり出したがなかなか気に入った箇所がみつからず、やっとみつかって切りとろうとしてもうまくいかず、キィーッと声をあげて歩きまわり、トランポリンで2・3度とんでみるがやはり心落ち着かぬげに降りてしまった。他の子がたのしそうにあそんでいる電車をとりあげてみたが、その子に奪い返され、再び奇声をあげながら新聞にもどる。セラピストが何とかうまく切りとってやろうとするが気に入らず、じだんだを踏んで悲しそうにヒィーッと叫んだ。

その様子を私とある保母が別室から見ていたが、その保母は私にむかってこう言った。「今日はえらく機嫌が悪くて、落ちつきがないですね。」私はしばらく黙っていて、こう答えた。「通君辛いやろうね。何一つ心なぐさめてくれるものがみつからない。何をやっても自分の心を安らかにしてくれない。誰よりも一番つらいのは通君やろね。」…保母さんはびっくりしたように私の顔をみつめ、やがて「そうですね。ああ、そうです。子どもの気もちになるってそういうことですね」と言った。

私が情緒障害児や自閉症児のプレイセラピィの指導や、障害児担当保母との話合いでしていることといえば、大旨(おおむね)こんなことである。むずかしい理論を言う気はない。子どもは理論の正しさを証明するためにいるのではないから…。そこに一人の子どもがいて、落ちつかぬ心をかかえて苦しんでいる。それを、「機嫌が悪くて落ち着きがない」と評価しても、その子の役にはたたない。それより、その子がその子なりに心落ち着かせようと努め、それが実らぬ故に苦しんでいるのだということを共に分ってくれる人がそこに存在することの方が、いくらか役に立つだろうと私は思う。だから私は、ことばにならないその子の心を、できるだけ大人に通じることばに翻訳したいと願っている。

「何かイライラして、あれこれしてみたり、大声を出してみたりするけれど心がスッキリしない時ってつらいですよね」と言うと保母さんは、「私もそういうことあります。今の通君はそんな気もちなんでしょうね」と言った。その時の保母さんの目には、わけの分らぬことをやる多動な自閉症児・通君ではなく、自分と相通ずる気持ちをもった一人の人間である通君うつっていたと私には感じられた。

3. うらやましさと淋しさと…（愛を求めての攻撃）

攻撃とは相手を傷つけるためにだけなされるものではない。そこには、うらやましさとくやしさと淋しさと悲しさと、相手に対してと同じくらい、いや、それ以上に自分に対しての憤りがこめられていると私には思われる。

達ちゃんは自閉的傾向をもった子であったが，特につばを吐きかけたり、人を噛んだりなぐったりという行動の目立つ子であった。ある療育の待ち時間、広い待合室で子どもたちはそれぞれの担当者と椅子にすわっていたが、何故か達ちゃんだけ担当者がその場におらず、ひとりで動きまわっていた。賢こそうな顔と、時々びっくりするような奇声、不安げな視線などは私にとって魅力的

で、観察者の立場であることを忘れて達ちゃんを見つめていた。そのうち達ちゃんは中央のテーブルの上にのるとドンドンと音をたてて歩きまわり、「達ちゃん！　そんなことしないの！」という声に、奇声をあげ、それぞれの担当者とゆったりとくつろいでいる子ども達に次々とつばを吐きかけはじめた。「達ちゃん！」と怒鳴られると次の子に…そしてテーブルの上から四方八方につばをとばした。「達ちゃん！」「やめなさい！」という声がそのたびにとんだ。

何故やめさせなくてはいけないのだろう。何故他の子たちは幸せなひと時をすごすことが許され、達ちゃんだけには許されないのだろう。達ちゃんの担当者がいないで達ちゃんが不安になっていることを知りながら、これみよがしに自分の担当する子を抱いてみせるその人たちに、私は怒りさえ感じた。焦ら立ちをひとり胸におさえつけ、悲しみにこぶしを握りしめてじっとおとなしく待っていろというのだろうか。そうすることが健康な心だとでもいうのだろうか。私には、腹立ちをつばを吐くことで表現している達ちゃんの方がむしろ頼もしく感じられる。

達ちゃんが私につばを吐きかけた。私は黙っていた。当然おこられるものと思って身をひいた達ちゃんは黙っている私をけげんそうに見つめた。私は見つめあった目で何とか〝君の怒りは分っているよ〟と伝えたいと思った。フッとつばを吐くのをやめた達ちゃんはテーブルの上をおそるおそる私の方に寄ってきて、私のすぐそばまで来、試すようにもう一度つばを吐きかけた。私は黙って、すぐそばまで来ていた達ちゃんのシャツに顔を近づけて、顔についたつばをぬぐった。私の顔と達ちゃんの顔がすぐそばにあった。達ちゃんはジーッと黙って立っていたかと思うと私の首に手をまわし、そっと抱きついてきた。「腹立ってたんだね。淋しかったんだね。」と言いながら私は達ちゃんを抱いた。ことばを語らぬ達ちゃんに、この私の言葉が通じたかどうか分らず、私は他に適切な伝達手段をもたない自分をもどかしく思った。

達ちゃんは私の手をとり、私の手のひらに噛みついた。もし達ちゃんが本気で噛むならもっと痛いはずだと思える程度の噛み方だった。達ちゃんは噛みつこうとしているのではなく、噛みつくということで何かを表現し、私を試そうとしているのだろうと感じて、黙って達ちゃんのするにまかせていると、達ちゃんは何回か噛んだあと、まるでキスするように私の手を吸いはじめた。乳首を吸っているかのようでもあった。私の指を吸いながらジーッと私の目をみつめ、ひざに頭をのせてゆっくりと体をゆすっている達ちゃんの顔にはさっきま

での怒りと悲しみの表情はうかがわれなかった。

達ちゃんの、つばを吐く、噛みつくという攻撃は、他の子は担当者とおちついた時をすごしているのに自分ひとり残されたくやしさと淋しさと、相手をしてくれない担当者や相手にしてもらえない自分自身への憤りと、そんなものが入りまじったものであると感じるのは私の思いすぎであろうか。我々が〝困った行動〟と感じている子どもの行動の中に、実はその子のせいいっぱいの表現、自己主張がずいぶんたくさん含まれているのではないかと思うと、今さらながら大人（もちろん私を含めて）の感受性の鈍さを悔やしく思う。

そして、攻撃をするのは敏感で傷つきやすいからこそであるという気もする。達ちゃんが黙って見つめる私から敏感に多くのものを受けとってくれたことからもそれは分かると思う。無言のやりとりの中で達ちゃんは私が伝えたいと願ったことにピッタリと応じてくれた。乱暴な子であるどころか、とても人にはまねできないくらい繊細な心の持ち主である。達ちゃんの感受性に助けられて、私もこの時充実したひと時をすごすことができた。

ただ、私のこのでしゃばった関わりのために、あとで、担当者が今まで以上に苦労したことをつけ加えておこう。今後の担当者と達ちゃんの長い関わりを考えると、第三者である私は、やってはいけないことをしてしまったのだ。これは幼稚園などで、担任と他の保母との間でもよくおこることで、担任が悪役をとらされてしまったりすることは多い。子どもをめぐっての三角関係を作り出さない配慮と節制は常に心すべきことであろう。

4. 先生のやらせたいことと僕のやりたいこと

ある日、自由時間に教室の中で子どもたちはそれぞれ遊んでいた。本を読む子、絵を描く子、黒板に字や落書きをする子、走りまわる子。靖君もそんな中で黒板に何か描いては大声で「先生！　先生！」とどなり、他の子も合せて大声をあげていた。先生は「靖君、そんな大きな声をあげなくても、先生ちゃんと聴えます。先生に聴えるくらいの声で言ってね」と言った。靖君は再び黒板に向って何か描き、今度は小さな声で「先生」と言った。靖君は約束を守ったのだ。しかし先生は他のクラスの先生と立話しをしていて返事をしなかった。「先生…。先生…。」そしてついに「先生！　見てェ！」そのとたん「靖君！大きな声出さない約束したでしょ！」という先生の返事。先生はその時の靖君の悲しそうな表情をみただろうか。「大声をあげなくても、ちゃんときこえる

よ」という約束をまず破ったのは先生ではなかったか。靖君はちゃんと約束を守ったのだ。なのに返事もしてくれず、他の人と話をしているから、靖君は先生には聴えていないのだと思ってだんだん声を大きくしていったのだ。その返事がこれでは靖君があまりに痛々しい。案の定靖君は黒板にチョークを投げつけ、ワーッと大声をあげながら教室の中を走りまわりはじめた。先生は当然「靖君！　どうして先生の言うことがきけないの！」と言う。靖君がもし言えたらこう言っただろう。「先生！　どうして僕との約束守らないの」と。靖君は次の遊びがみつからず、フラフラと歩きまわっていた。先生はやがて他のクラスの先生と話しおわり、何人かの子どもを集めて「あぶくたったしようか」と言った時、靖君はボールを見つけ、「あっ。これで遊ぼう」とでもいうように目を輝かせた。靖君はこわがりなところがあり、投げられたボールを直接うけとることができない。先生も何度か靖君にボール投げをさせ、こわさを取り除こうとしたこともあった。しかしこの時先生の頭には「あぶくたったをする」ことしかなかったのだろうか。せっかくの自由時間に靖君自らボールを手にしたこのチャンスを、ボールへの恐怖心を克服するために使うという思いは浮ばなかったらしい。ボールを床にうちつけてはずませている靖君に「靖君、そんなことしないの！」と声がとんだ。「ほら、あぶくたったしよう！」〝ボクは今やっと自分の力で、自分が挑戦し、自分を表現できるかもしれない手段（ボール）を見つけ出したところだ。何故「あぶくたった」を先生がやりたいからといって、今、ボールを捨ててそれをやらねばならないのだろう。ボクが発見した遊びに先生が入ってくれてもいいではないか。そうかと思うと、ボール遊びなんかこわくて、したくない時に、先生はボールを投げてよこし、とれるかどうかをためすくせに。僕はこわくて、ワンバウンドで投げるのに、先生は「ホラ、とってごらん」とまっすぐ投げてよこす。こわい気持もちのある時に、こわいことをされても、こわさはとれないんだ。こわくない方法からゆっくりとやってくれれば慣れるかもしれないけれど。〟

私の心の中にはこんな靖君のつぶやきが聴える気がした。あとでこの先生と話すことがあり、黒板でのこと、ボールあそびのことについて、私は靖君の心の動きをこう翻訳してみた。聴いていた先生の目に涙がたまっておちた時、私は、いい先生なんだなと思った。ただ、靖君の伝えていることばが、まるで外国語のように翻訳されずに出されるから、受け取り方がチグハグになって、先生も靖君も苦しむことになってしまっているだけなのだろう。私はよく、こん

な風に職員研修などに参加し、子どもとの関わりを観察したりした中から、子どもの心が言おうとていることを翻訳するが、そんな時、いつも返ってくるのは、「こんな簡単なことが、どうして分ってやれないんでしょうね」という先生方のことばである。そして「分ってやろう」という気もちが生れるのを見て、「あゝ少しは役に立てたかな」と思う。この時もそうであった。

5. 奪われた安定基地はもどってきてももう基地にはならない

お気に入りのおもちゃのある子は多い。園にやってきてまずそのおもちゃを触ってからでないと何もできなかったり、他のあそびをしばらくして、ちょっとそのおもちゃに戻り、また他の遊びへと出ていったり、他の子とけんかしたり、いやなことがあったりするとそのおもちゃの所に行くとか、まるで基地のようになっているおもちゃのことを安定基地とよぶことがある。

政ちゃんの安定基地は、乗って動けるような大きな電車であった。政ちゃんはいつも不安げに動きまわり、先生の言うことをきかず、ひとりで動きまわることの多い子で、情緒障害とみなされていたが、その電車が安定基地になってやっと落ち着いた矢先、その電車をめぐっての宿敵があらわれた。政ちゃんもその子も元気がよく、その電車を奪いあってけんかが絶えなくなった。どちらかがその電車で遊びはじめると必ずもう一方がやってくる。担任もそのけんかには手をやいて、ついにその電車をかくしてしまうことにした。ある朝やって来て電車がみつからない政ちゃんは、以前のようにウロウロと歩きまわり、元気なく、けんかもしなくなった。ところが、けんかしていたころの方が、むしろ先生の言うことにも従え、課題もできたのに、電車がなくなってからは、けんかだけでなく、心の安定も失われてしまっていた。

数日して、あまりに元気のない政ちゃんの姿に担任は再び電車を出した。その時の政ちゃんの嬉しそうな顔といったらなかったという。ところがけんかも再開。元気は出たが、クラス中が騒々しい。一週間ほどして再び怒った担任は電車をかくしてしまった。けんかと元気さと安定が消え、政ちゃんは昼寝もせず、先生のあとを不安げについてまわった。しばらくして担任は、以前の喜々とした顔や笑い声をとり戻したいと思い、電車を出した。ところが政ちゃんはチラとそれを見ただけで、もはや嬉しそうな顔をすることも、それで喜んで遊ぶこともしなくなっていた。担任は、〝おかしな子や。子どもって飽きっぽいな。こういう子は気が変りやすいのかな〟と思ったという。

この報告をうけて、私は職員研修の場でこう言った。「安定基地—それは港みたいなもので、そこでホッと休んではまた航海に出てゆくとか，家で休んではまた遊びや戦いに行くとかそんなものです。航海や戦いが苦しくても、あそこには港があり家が待っていてくれると思えば安心もでき，がんばりもできる。まず電車のとり合いは、これはその港・城をめぐっての攻防戦です。これはまだ基地の奪い合いですから基地はあるわけで、自分のものになる可能性もあるわけです。ところが、その基地がなくなった、これはたいへんなことです。旅に出ている間に家が跡かたもなくなってしまったようなもの。もし自分の家に他人が入りこんでいるのなら、その人とけんかしてでも追い出せばすむことですが、家そのものがなくなってしまったのでは、もうどうしようもない。電車を失った政ちゃんの気もちは、そんなところでしょうね。」

「二度目に出した時、政ちゃんがもう愛着を示さなかったのも、これも当然でしょう。だっていつも安定して存在しているからこそ、それを基地にできるのであって、出てきたりまたなくなったり、しょっ中不安定なものを安定基地にすることはできませんから、政ちゃんとしたら、二度目に電車がなくなった時、もう電車を安定基地にすることは捨てたのかもしれません。その電車そのものが大切なのではなく、その電車がいつも自分を待っていてくれて、その電車で遊ぶと心落ちつく、という体験が大切なわけですから、いつなくなるか分らないような電車はもう政ちゃんの心にとって大切なものではなくなってしまったのです。政ちゃんは、もっと安全で、なくなってしまいそうにない別の安定基地をまた捜さねばなりませんね。」

私のこんな翻訳をききながら、担任の先生は悲痛な表情をしておられた。「私は、けんかの元がなくなればもっと落ちつくと思っていたんですけど…。」その意図はよくわかるが、政ちゃんの体験を翻訳すると、どうしても先に述べたようなことになる。意図がいくら正当でも、それが一方的で子どもの心の動きにあっていけなければ、結局「わけの分らんことをやる子」という結論にいきつくことになってしまう。「わけの分らんことをやる子」という言い方は、本当は、「子どもがせいいっぱい表現しているその意味を、申し訳ないがどうしてもこちらが鈍くて感じとれない」ということであろう。

おわりに

ここでとりあげた関わりは、何も特別の事態というほどのものではなく、む

しろ、ちょっとふりかっててみれば、ああ自分もこんなことをやっていたなあといったことが多いのではないかと思う。そしてまた、ここで述べたことは、ここに登場したこの子、この場面に限られたことではない。多くの子ども達と保母達の関わりを見ているといつも私は、子どもの心の深さと広さ、複雑さに驚かざるをえないのである。そんな時私の心の中には、翻訳者としての自分をみがいてゆきたいと願う気持ちと、先生と子どもの間に翻訳者が不用になってほしいという２つの気持ちが動いている。

最後にここに登場した子どもたち、せいいっぱいの表現で私に多くを教えてくれた子ども達と、研修会などでこうした子ども達との関わりを率直に報告し、私の翻訳に耳を傾けてくれた先生・保母の方々、セラピスト達に深く感謝したい。私の、子どもの心の翻訳が何かの役にたてるとしたら、その人達のおかげである。

（昭和55年８月９日　脱稿）